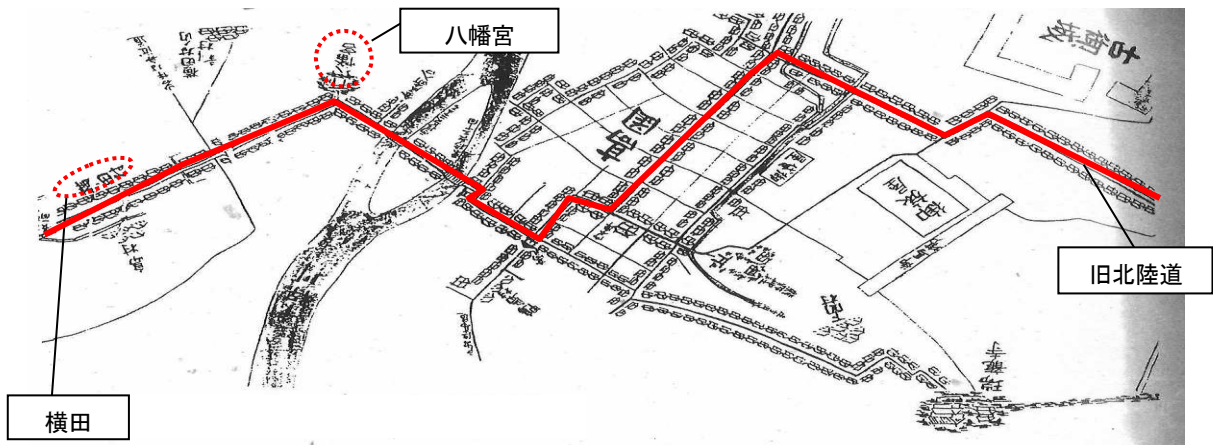


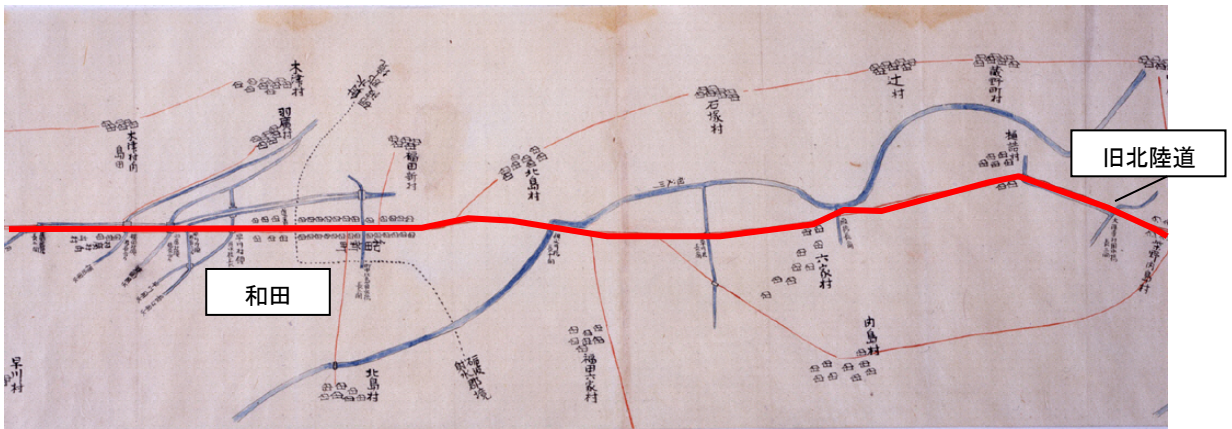
## 5 旧北陸道における越中福岡の菅笠づくり及び祭礼行事等に見る歴史的風致

### (1) はじめに

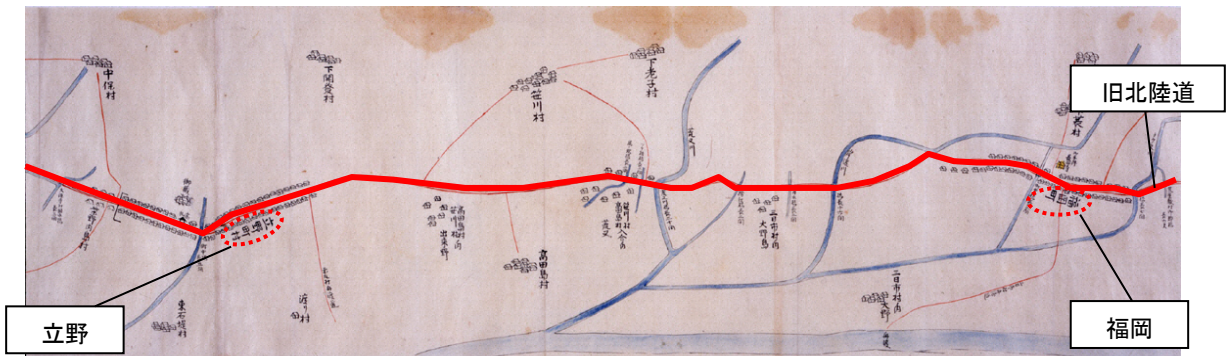
高岡と福岡は、古くから主要な流通経路として利用されてきた<sup>\*1</sup> 北陸道で結ばれていた。近世後期には、山町筋を通過した<sup>\*2</sup> 北国街道（以下、街道）は博労地区を通り、横田を抜け、和田、立野を経た後、福岡、今石動、金沢へと通じていたことがわかる（『富山県歴史の道調査報告書—北陸街道—（昭和55年（1980））』より）。山町筋から福岡までは、『石黒信由作図 砺波郡・射水郡御鷹野道見取絵図（文政11年（1828））』からも見ることができる。



高岡～横田



和田～立野



立野～福岡

石黒信由作図 砺波郡・射水郡御鷹野道見取絵図（文政11年（1828））財団法人高樹会蔵 一部加工

## i) 高岡～立野

博労地区にある通町は、街道と戸出往来との合流点近くであり、町会所（町奉行や町役人が出仕して執務をとる行政機関）のある二番町の隣であったことから、繁華街として栄えていた。千保川に向かって進むと中島町があるが、中島町は、千保川と中島川に挟まれた中州上の町であった。はじめは農地として開かれたが、のちに舟着場となり、物資の集散で賑わいを見せた。千保川を渡ると横田に至る。当時の横田町は、高岡の発展に伴う町の拡大によってできたものであったため、商家が増えたところでもある。ここから西へ進むと千石町があるが、このあたりには、西の躰踞場が設けられていた。躰踞場とは、服装を整えた町奉行や町役人が平伏して藩主を送迎したところである。

さらに西へ進むと和田、立野、福岡があり、人馬が往来する宿場町や在郷町などとして賑わいを見せた。立野は、慶長11年(1606)の市立ての制札を持つ宿場町で、駅馬が置かれ、藩の御蔵や高札場があった。1 km に満たない町並みに多くの町名があり、天目町・寺町・御宝町・橋番町・高札町・御蔵町・鍛冶屋町・八軒町と並ぶ。高札場は、幕府や藩の法令や禁令などを知らせるために掲示された場所のことで、立野中央橋に隣接する高札町辺りと伝えられる。

現在でも、中島町の水天宮祭、和田で行われる佐助祭、立野の福田神社の秋季祭礼などが催されていることや、道沿いには地蔵を見ることができ、街道沿いの重要な拠点として発展した姿や主要な陸上交通として歩んできた街道の姿を今に残している。

## ii) 立野～福岡

福岡は、菅笠の生産地であり、集散地である。この地域の菅笠づくりの起源は諸説あるが、古くは庄川や小矢部川の氾濫や、大地震等により発生した低湿地に自生した菅を利用して行った蓑作りから派生したものだとも伝えられている。以降、山間を中心に水稻の不適作地を利用し菅を育て、小矢部川の河原や中州を利用して菅干しが行われてきた。江戸時代には、加賀藩の奨励も受け、現小矢部地域や福岡地域、立野や東五位など広い範囲で積極的に生産されるようになった。17世紀の後半には、「加賀笠」の名で江戸や京都、大坂、西国筋、上州など全国各地へ出荷されていた加賀の菅笠だが、ここでも福岡や小矢部を中心とした地域は大きな役割を果たした。全国へと販路を拡大するにつれ、菅笠の原料となる菅が不足したことから、19世紀以降、大量の菅を砺波郡から仕入れていたようである。また、金沢の堀川町で菅問屋街が形成されてくると、砺波郡で生産された菅笠の一部も堀川町の間屋へ出されるようになり、地元から直接出荷するものとの相乗効果でますます「加賀笠」の名が広まっていったようである。元禄元年(1688)には、立野村より菅笠を越内及び上方へ毎年二、三、六、七月頃に売りに出かけ、富山藩領へは毎年毎月販売に出かけると記載がある(富山県立図書館『五十嵐留帳』より)。

昭和31年(1956)には、菅笠集荷協同組合が設立されており、そのなかには立野及び和田の代表者も加わっていた（『立野郷土史（平成6年（1994））』より）。このことから、菅笠づくりも関係して中島町、和田、立野が宿場町や在郷町として賑わいを見せていたと言える。

菅笠は、今でもかつてと変わらず手作業で作られており、平成21年(2009)には、その技術や菅の生産から菅笠の製作、販売までの全工程をこの地域で行っていることが高く評価され、「越中福岡の菅笠製作技術」として重要無形民俗文化財の指定を受けた。また、平成29年(2017)には「越中福岡の菅笠」が国の伝統的工芸品に指定された。現在では、高岡御車山祭で山車を警護する山役人が菅笠でつくられた一文字笠をかぶっている。



菅笠



山役人（一文字笠）と高岡御車山

- ※1 北陸道…古代に整備された道。律令制下において、中央と地方諸国を結んだ7本の幹線道路の1つ。7世紀後半頃から本格的な整備が進んだ。当時は、道路に沿って人・馬を常備した駅を置き、駅を伝って往来する交通手段である「駅伝制」によって諸国を連絡した。
- ※2 北国街道（街道）…江戸時代に整備された五街道（江戸・日本橋を起点とする幕府直轄の主要な5つの陸上交通路。東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州街道がある。）の主要脇道。五街道の管轄下が幕府の道中奉行であったのに対し、脇道は、勘定奉行であった。また、参勤交代に使用された道は往還道とも呼ばれる。

## (2) 歴史的風致を形成する建造物等

<sup>すげがさ</sup>  
(菅笠づくりに関連)<sup>きしのけ</sup>  
①岸野家

現在も現役で菅笠問屋を営んでいる岸野家は、切妻造り・平入り・2階建て・登り梁という古い形式を残すもので、昭和20年(1945)に建築された住宅である。

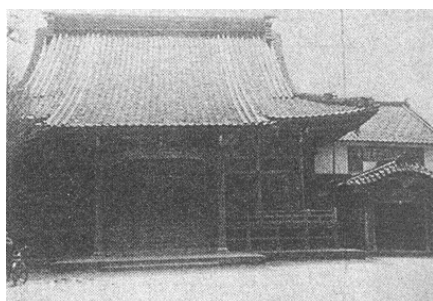
(『歴史的建造物調査事業(平成22年度(2010年度))』の報告書より)



岸野家

<sup>ちょうあんじ</sup>  
②長安寺

長安寺は、寺伝によると大永5年(1525)赤丸村に創建したと伝えられているが、それを立証するものはない。しかし、寺院に所蔵されている『蓮如上人真影裏書』に「寛永」とみえることから、およそ寛永頃に成立したとみられている。また、本堂は江戸中期の建造とみられ、黒漆塗りの内陣を取り込み、両脇床上の<sup>かえるまた</sup>臺股には雄大な桐紋が彫られており、本堂内陣<sup>けんうめばち</sup>宮殿には前田家の劍梅鉢をみることができる。加賀藩歴代藩主が参勤交代に際して休憩所として利用していたことでも知られており、これは『<sup>とのさまおなりきろく</sup>殿様御成記録』として保存されている。



長安寺(昭和44年(1969)頃)

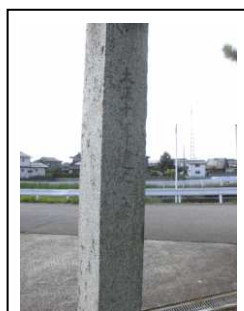


現在の長安寺

（旧北陸道に継承されてきた祭礼行事等に関連）

③福田神社

創建年月は不詳とされているが、明治43年(1910)3月に福田神社の社号許可がなされた。石柱には「福田神社 大正十年建立」の刻印が見られるほか、鳥居には「昭和十年九月建立」の刻印が見られる。現在の社殿は老朽化により昭和54年(1979)に建てられた。立野に伝承される獅子舞はこの福田神社を起点にして実施される。



大正10年建立との刻印が見られる



福田神社



福田神社鳥居



昭和10年9月建立との刻印が見られる

④和田神明宮

慶安2年(1649)に和田佐助他6人が町立てし、翌年3月9日に神明様を勧請したと伝えられている。石柱には「大正十年九月」と刻印されている。



和田神明宮



大正10年9月との刻印が見られる

あり そしょうはちまんぐう  
⑤有儀正八幡宮（再掲）

86 ページを参照されたい。（<sup>かなや</sup> 鑄物のまち金屋に見る歴史的風致）

⑥地蔵

旧北陸道は、主要な陸上交通の流通経路として古来より利用されており、その道沿いには、地域の守り神や道行く人々の交通安全を祈願する地蔵が今も多く祀られている。集落の境界が示される道しるべとしての機能は、いくつかの松（<sup>おうかん</sup> 旧往還の松）にもその名残が残る。



昭和38年8月建立  
との刻印が見られる

昭和38年（1963）建立



昭和35年9月との  
刻印が見られる

昭和35年（1960）建立



大正3年建立との  
刻印が見られる



大正3年（1914）建立



昭和39年5月31日竣工  
との刻印が見られる

昭和39年（1964）建立

### （3）歴史的風致を形成する活動

#### ① 菅笠づくり

##### i) 菅栽培～刈り取り

菅笠づくりは7月頃の育苗床づくりから始まる。刈り取りの終わった菅田を起耕し、水を入れ肥料を施す。その後、代かきを行い、田面を平らにして苗床がつくられる。9月下旬に夏芽が萌芽した菅のうちよいものを抜き取って苗とし、9月中旬から10月中旬にかけて植える。植えられた苗は12月頃に枯れ、新芽が出始めてから雪に覆われることになる。融雪後3月下旬から5月中旬にかけて不良芽が間引かれた後、7月中旬によろやく刈り取りの適期を迎えることとなる。



菅田（西明寺地内）

この頃には、山間などで青々と茂った菅田で、人々が手作業で刈り取りを行う風景をみることができる。刈り取られた菅は平場に集められ長菅と短菅に分けられた後、7月下旬の晴天の日に天日干しされる。かつては山間地の斜面や河原や中州を利用していた干し作業は、現在は家の庭などで行われている。あたり一面に菅草が敷き詰められた光景は現在も季節の風物詩となっている。



菅草刈り



菅干し

##### ii) 製作

菅笠の製作は、竹を割って笠骨をつくる仕事と、笠骨に菅を縫い付ける仕事に分けられる。昔から笠骨づくりは男の仕事、笠縫は女の仕事とされてきた。笠縫の作業は、福岡全域で行われているが、特に西山丘陵の山麓に位置する西五位地区に従事者が多い。この地域には、アズマダチ民家がよく見られる。笠縫作業もこのアズマダチ民家の広い座敷などを利用して行われている。



菅笠づくりの様子（笠骨）



菅笠づくりの様子（笠縫）

## iii) 販売

つくられた菅笠は福岡の街道沿いの問屋街で保管され、全国の笠販売所へ卸されていた。元治元年（1864）には210万蓋の菅笠が出荷された記録もあり、今も街道沿いには、長安寺や明治期から昭和初期に建てられた町家としては比較的規模の大きい民家が数多く残されている。これらの民家は、上部が吹き抜けのオイと呼ばれる間があり、その上に菅笠を保管する場所として中二階を設けている例が多い。現在も菅笠問屋を営む岸野家がある。



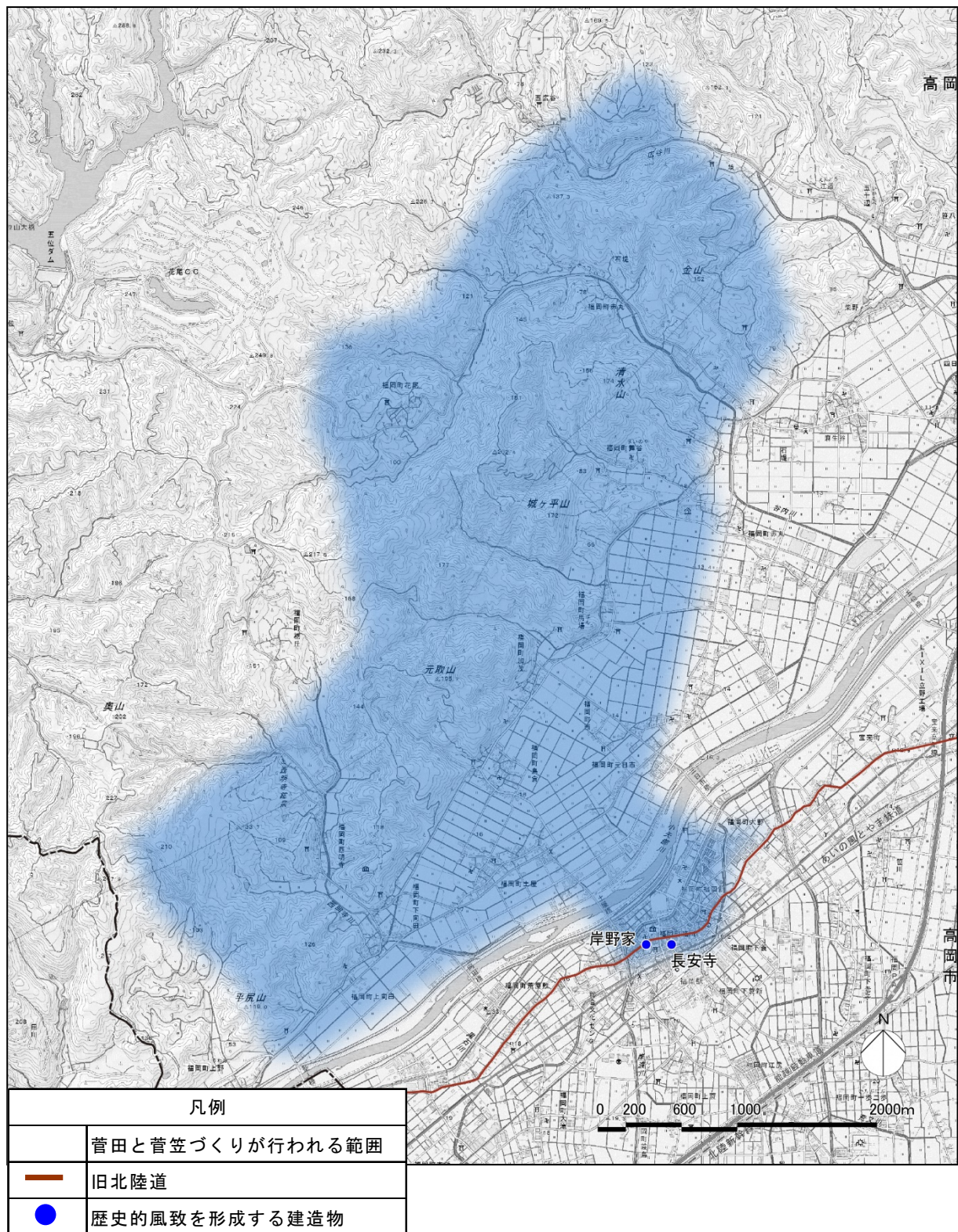
旧菅笠問屋



昭和10年代の町並み 滝写真館提供



近年の町並み



図：菅笠づくりに係る範囲

## ②旧北陸道に継承される祭礼行事

## i) 福田神社の秋季祭礼

立野では、前述したような豊かさを背景に福田神社の秋季祭礼において獅子舞が行われてきた。大正8年（1919）に立野村青年団が創立され、獅子舞が担われてきたことが『立野郷土史（平成6年（1994））』に記載されているとともに、昭和32年（1957）4月25日の地元新聞記事においても、「\*開駅を祝って繰出した地元立野青年団のシ、舞」との記載があることから、立野青年団により獅子舞が実施されてきたことがわかる。平成19年（2007）4月の地元新聞においては、立野上町大獅子保存会が受け継いでいると記載されており、現在まで継承されていることがわかる。なお、同記事においては、同じ立野地区のうち笹川地区について、約20年前から担い手の年齢層を40代まで広げながら獅子舞を大切に守ってきた旨の記載があることから、獅子舞がかけがえのない地域の宝物となっていると言える。

立野の獅子舞は、大獅子と小獅子が伝承されており、小獅子は立野上町と立野東町で分かれてそれぞれに舞がある。大獅子は女獅子で、天狗と争うこともなければ、花（祝儀）をうつこともない。また、獅子の胴幕の長さがおよそ12mあり、20人の人足で動かされる。昭和50年（1975）9月18日の地元新聞記事にも「17年ぶり 雄姿復活 全長15メートルの大じし」との記載があることから、当時から現在と同じ形式で執り行われていることがわかる。獅子は、各家を回り、笛と太鼓の囃子が鳴る中、玄関口で口をパクパクとさせて、家の邪気を追い払う。福田神社でも奉納される。リズムカルな舞で天狗による獅子あやしを特徴とする氷見獅子と、胴幕に竹が入る大型の獅子である砺波獅子を融合した形態である。

※ 開駅…記事中において西高岡駅が開設されたことを示している。



獅子舞の様子



北日本新聞

昭和50年（1975）9月18日付

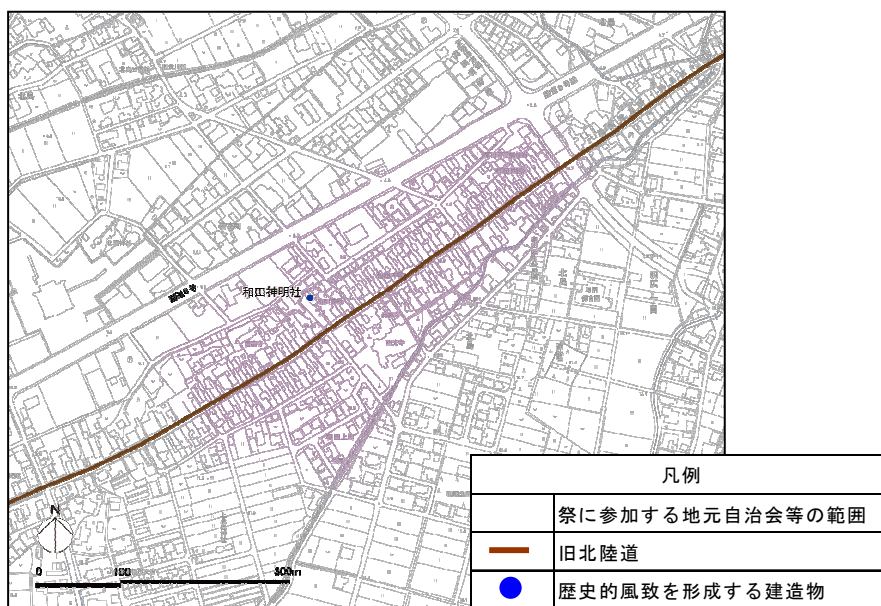
## ii) 佐助祭

佐助祭は、和田で行われる祭礼行事である。和田は、慶安2年（1649）に砺波郡佐野村の佐助らの藩への嘆願により開かれた町である。しかし、町立て直後は年貢の負担等により町民の生活は非常に苦しいものであった。そこで、この状態を見かねた佐助が隠田をつくり、町民らを困窮から救おうとしたが、藩の知るところとなり処刑されてしまったのである。佐助祭は、この佐助の恩に対し町民らが彼の遺徳を偲び行うもので、佐助の悲運な死後すぐに始められた。もとは和田新町の町立てが藩に許可された9月15日に行われていたが、現在は変更されている。いつごろ変更されたかは不明であるが、明治年間（1868～1911）のことだといわれている（『富山県祭り・行事調査報告書（平成14年（2002））』より）。

当日は、まず和田神明宮の神事から始まる。その後、同神社の境内地にある佐助大明神を祀った小さな祠の前で祭文や玉串の奉納がなされる。なお、祭りの際には、地元自治会等の各家の軒先には佐助の像が描かれた行灯が掛けられることとなっており、その地区の伝統的な町家の軒先にも行灯がかけられる。昭和31年（1956）2月28日付の地元新聞にも「佐助祭りとして軒毎に行灯をかかげ、そうして夜高のねり回りをおこなって追悼している」との記載があり、当時から同じ形式で行事が行われていることが分かる。この行灯の絵は、青年団らが作って各家に配布してきた。また、佐助の好物であった「いもがもち」（新米といものこを混ぜたもの）を作って食べたが、近年は「いもがもち」の代わりにもち米と里いもを混ぜて作り、小豆をまぶして食べることもある。



行灯



図：佐助祭に係る範囲

### iii) 水天宮祭

水天宮祭は中島町で行われている祭礼行事である。中島町は、街道と千保川の交差点に当たる地で、かつては千保川の本流と、中島川と呼ばれる支流に挟まれた中州で、水陸交通の結節点として重要な役割を果たしていたが、立地上水害の多い地でもあったことから、古くから水天宮を祀っており、これが現在の水天宮祭へ繋がったと考えられている。現在の形で祭礼が行われるよう

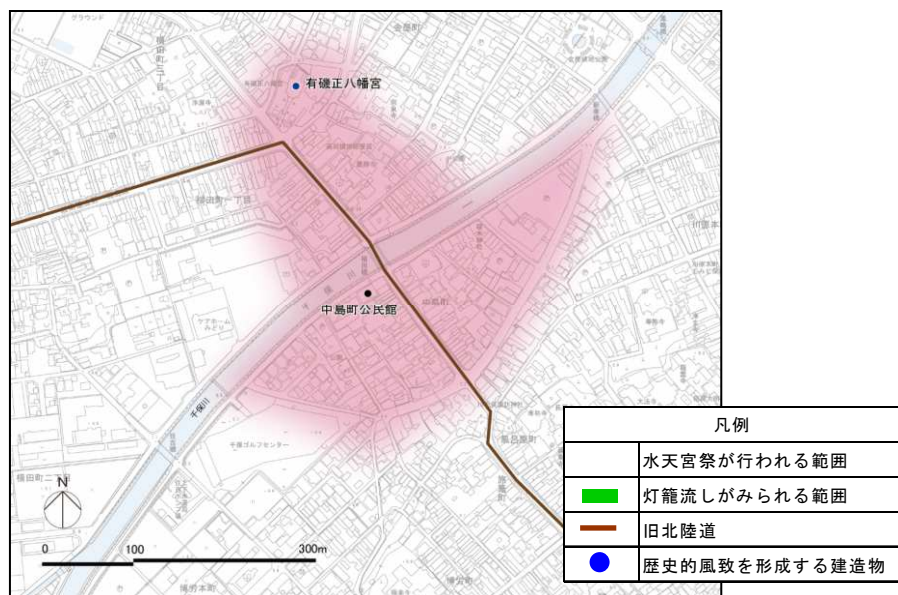


水天宮祭の様子

になったのは、大正3年（1914）からであることが判明している（『とやまの文化財百選シリーズ4 とやまの年中行事（平成20年（2002））』より）。

当日は、有儀正八幡宮から御神体を中島町の御旅所（現在は中島町公民館）に渡御し、神事が行われる。このとき、御神体が乗る唐櫃が千保川を渡るときに神々に喜んでいただくよう流し火が行われており、これが現在の灯籠流しと伝えられている。また、有儀正八幡宮は中島町とはやや離れた横田の外れにある宮であるが、これは、水害により御神体が何度か場所を変えた結果、その無事を確実なものとするために有儀正八幡宮に置かれはじめたことによる。

辺りが暗くなり始める頃に、数多くの灯籠が千保川へ流される。行事の様子は、昭和36年（1961）12月19日付の地元新聞に「名物は水天宮祭り 千保川に川舟を浮かべ約一万ものロウソク舟が流される」との記載があり、当時と変わらない形式で行われていることが分かる。最近では、釘を使わずにローソクを立てる工夫を取り入れるなど、環境への配慮の上実施されている。



図：水天宮祭に係る範囲

## iv) 地蔵の信仰に関する活動

旧北陸道沿いには、地域の守り神や交通安全の神様として地蔵が多く祀られている（『市内各地区の行催事・文化財等調査結果（平成5年（1993））』より）。各自治会等において、地蔵には花などが供えられるとともに、赤い帽子や前掛けがかけられているものも見受けられ、日ごろから大切にされていることがわかる。地元住民による安全祈願の意味合いが込められていることが伝承されている。



地蔵祭の様子

（北日本新聞 昭和59年  
（1984）10月1日付）

また、平時の報恩感謝もあり、8月を中心として地蔵<sup>じぞうまつり</sup>祭が行われている。これは子孫繁栄や悪霊退散など、いわゆる道祖神信仰と結びついた地蔵菩薩の縁日として行われるもので、「地蔵<sup>じぞうまつり</sup>祭」や「地蔵<sup>じぞうぼん</sup>盆」、「おんぞはんまつり」、「ぞうはんまつり」などと呼ばれる。普段は道路沿いにある地蔵を集会所などに集め、お供え物を供え、紅白幕を張り、祭壇を整える。この様子は昭和59年（1984）10月1日の地元新聞にも掲載されている。戦前ごろまでは、物語・歴史上の人物・景色等を装飾するため、野菜などを材料に「つくりもん」を作っていた地域もあったと伝承されるなど、地域によって実施の仕方が異なっており独自に継承されている。小・中学生により実施され、大人が運営などの世話をする。

『富山県の民俗芸能・富山県民俗芸能緊急調査報告書（平成4年（1992）3月）』のための基礎調査として地元に取り上げた内容からも、古くから伝わり、毎年実施されていることが地域の誇りにつながっていることが判明している。また、旧北陸道沿いに関して以下の記載が見られる。

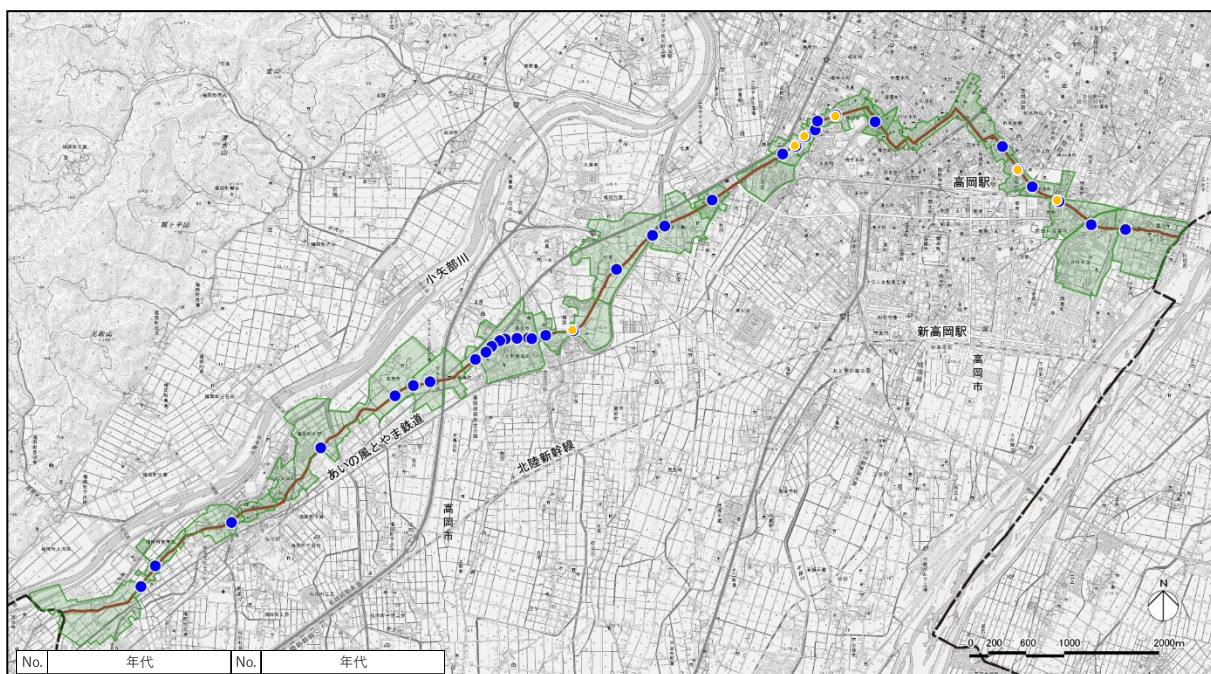
- ・各戸より500円ずつ集めて供え物を買ひ、供えた後、おさがりを各戸に子供達が配る（野村地区より）
- ・毎年児童会が中心に夏休み中、町内の地蔵さん祭りが行われます。各家より地蔵さんに供える金品（芳志）を集め僧侶を読んでお経と子供への説法説話を話してもらい、子供達の神佛への精神修養と集団のふれあいをもち楽しい夏のつどいとして昔より楽しみみの行事です。供物は各家に配ります。（定塚地区より）
- ・町内国道八号交差点で事故が多く有りましたので地域の方々の努力で交通安全地域として建立された。（横田地区より）
- ・前回より地蔵様をそうじして飾り付けを行い当日尼僧に経をあげてもらい子供たちの交通安全を祈願その後ゲーム等をして遊ぶ。（立野地区より）

（『市内各地区の行催事・文化財等調査結果』（平成5年（1993）6月）より引用）

なお、昭和46年（1971）2月28日の地元新聞においても、道祖神信仰と結びつく地蔵祭の様子として「福岡町の地蔵<sup>ふくおかまち</sup>祭り」が掲載されている。



道沿いの地蔵（一部）



No.	年代	No.	年代
1	昭和39年 (1964)	18	不明
2	昭和45年 (1970)	19	昭和39年 (1964)
3	不明	20	昭和39年 (1964)
4	昭和45年 (1970)	21	昭和39年 (1964)
5	不明	22	昭和35年 (1960)
6	昭和38年 (1963)	23	昭和35年 (1960)
7	昭和45年 (1970)	24	昭和35年 (1960)
8	昭和58年 (1983) 再建	25	昭和30年代 (1955~1964)
9	昭和32年 (1957)	26	昭和30年代 (1955~1964)
10	昭和33年 (1958)	27	昭和30年代 (1955~1964)
11	昭和59年 (1984)	28	昭和28年 (1953)
12	昭和57年 (1982)	29	昭和15年 (1940)
13	昭和7年 (1932)	30	昭和30年 (1955)
14	明治6年 (1873)	31	昭和43年 (1968)
15	昭和9年 (1934)	32	昭和43年 (1968)
16	大正3年 (1914)	33	昭和37年 (1962)
17	寛政12年 (1800)	34	昭和43年 (1968)

凡例	
	各地蔵の信仰（お供え物や祭りなどに参加する）に係る地元自治会等の範囲
	旧北陸道
	地蔵（50年以上）
	地蔵（50年未満もしくは不明）

表：各地蔵の年代一覧表  
（右から順に付番）

図：地蔵における信仰に係る範囲

#### （4）まとめ

旧北陸道は、「道」として各時代において重要な役割を果たしており、人々の往来があることで、「物流」としての役割を持ち、人々の交流を活発化させ、生活を支えてきた。街道沿いにみる祭礼行事や地蔵菩薩もその一つであり、こうした豊かさを背景に行われているものや水陸交通の結節点であることから水害から守るために行われるようになったものなどがある。

菅笠づくりでは、長安寺をはじめとした歴史的な建造物や岸野家などの菅笠問屋が街道沿いに残されており、山間で栽培した菅をふもとの集落で菅笠として製作し、菅笠問屋が保管し、全国へと卸されている。山間に広がる菅田や菅干しの光景は現在も続く季節の風物詩となっており、周辺の市街地と一体となって良好な歴史的風致を形成している。

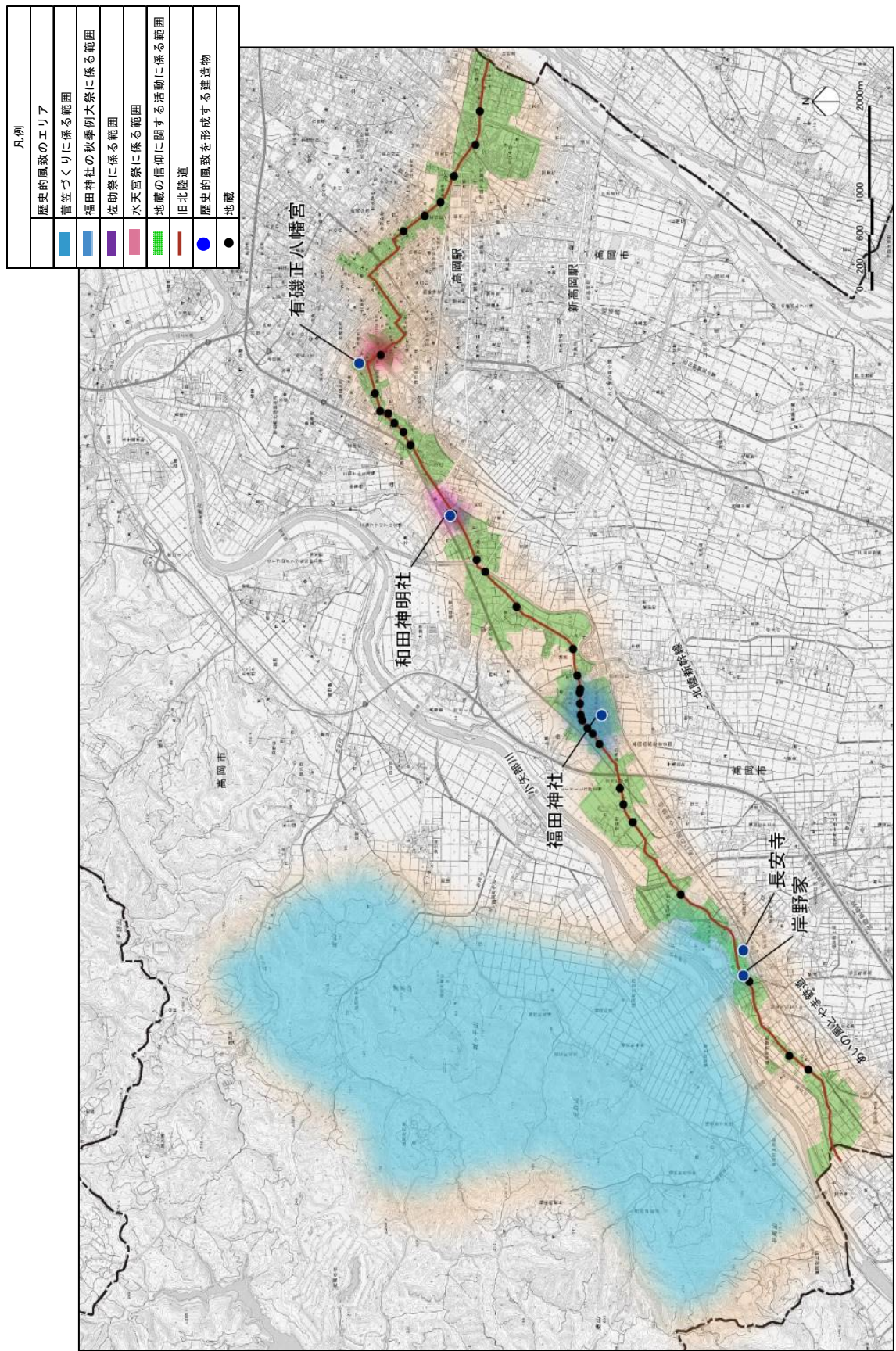
福田神社の秋季祭礼では、大獅子や子獅子が各家を回り、笛と太鼓の囃子が鳴る中、玄関口で口をパクパクとさせて、家の邪気を追い払う様子は、歴史的な町並みと相まって良好な歴史的風致を形成している。

和田神明宮の神事から始まる佐助祭は、各家の軒先に佐助の像が描かれた行灯が掛けられ、同神社の境内地にある佐助大明神を祀った小さな祠の前で祭文や玉串の奉納がなされ、佐助の好物であった「いもがもち」を食すことにより、町全体が佐助への感謝の念一色で染まり、固有の歴史的風致を形成している。

水天宮祭は、有磯正八幡宮から御神体を中島町公民館に招くことから始まり、辺りが暗くなる頃に、数多くの灯籠が千保川へ流される。漆黒の川面に灯籠の明かりがゆらめく幻想的な雰囲気醸し出しており、周辺の市街地と良好な歴史的風致を形成している。

そして、旧北陸道沿いに地域の守り神や交通安全の神様として祀られている地蔵には、花などが供えられているとともに、赤い帽子や前掛けがかけられているものも見受けられ、日常的に大切にされている。また、子孫繁栄や悪霊退散など、いわゆる道祖神信仰と結びついた地蔵菩薩の縁日として行われる「地蔵祭」も執り行われており、普段は道路沿いにある地蔵を集会所などに集め、お供え物を供えるなどして祭壇を整え、実施されている。これらは古くから継承されており、道行く人々の無事を祈り、その地域を見守る神様である地蔵を大切にしている様子は、周辺の市街地が相まって良好な歴史的風致を形成している。

これらのことから、旧北陸道沿いで賑わいを見せていたそれぞれの地域では、菅笠づくりとその流通が地域の発展に経済上の重要な役割を果たしていたとともに、現在も受け継がれる祭礼行事等の継承に固有の歴史的風致を形成している。



図：旧北陸道と越中福岡の菅笠づくりに見られる歴史的風致

(コラム) ～<sup>おうかん</sup>往還の松～

加賀藩は、慶長6年（1601）に、街道沿いに松並木の植樹を命じた。このような松を「<sup>おうかん</sup>往還の松」と呼び、道行く人々に木陰を与え、冬の深雪時には吹雪で道を踏み誤らせることのないよう道中の助けとされた。その植樹方法は、2間（約3.6m）に一株の割合で1里（約4km）の間に片側830株の割合によって植えられたとの記録が残されている。また、道路の清掃や修理などの道の管理のために道番人が置かれた。

しかしながら、今日に至るまで台風や落雷などにより次々に姿を消してしまった。<sup>ふくおか</sup>福岡に1本だけ残されていたが、それも枯れてしまい、平成15年（2003）にやむなく伐採された。現在、残されているものはないが、<sup>かみきたしま</sup>上北島、<sup>たての</sup>立野、<sup>ふくおか</sup>福岡には再現されたものがあり、人々とともに生きてきた存在を後世に伝えようとしている。



上北島地内



立野地内



福岡地内